

〈教員紹介〉

考古学そぞろ歩き

上峯 篤史

1. 石器との遭遇

私の研究対象は石器である。人類が生活のなかで必要に迫られ、岩石を打ち割って仕上げた道具やその出来そこない、またはその製作過程で生じた残滓が、私の好物だ。研究時間の約7割は石器のことを考えているし、博物館に出かけても大半を石器の前ですごす。家電量販店でPCやスマートフォンの文字入力を試すときにも「せつき」と入れてしまうし、道ばたに転がっている石ころがどうにも気になる性分である。学部1回生時に興味をもって以来だから、人生の半分以上、頭のなかを石器でいっぱいにしてすごしてきたことになる。

18歳の私は、「田舎から出て一人暮らしをし、大学にも行かせてもらうのだから、きちんと学問を修めよう」という真面目な志で肩をこわばらせて、立命館大学文学部史学科日本史学専攻に入学した。小学生の頃から歴史には興味をもっていたので、学部選びには悩まなかつたが、考えていたのはここまでである。大学でどんな勉強をしたいか、具体的に考えていたわけではないし、もちろん将来のことなど何も考えていないかった。

日本史学専攻では文字史料をあつかう日本史学と、物的資料をあつかう考古学の二つが学べたが、そもそも両分野の区別さえ、当時の私にとっては曖昧だった。そんなとき、考古学研究会という大学公認サークルの新入生歓迎ブースが目にとまり、手招きに誘われて着座した。先輩方は、サークルの勧誘というより考古学のおもしろさを熱心に、そして楽しそうに語って下さった。考古学を学べば、自分の大学生活も楽しくなる気がして、すぐさま入部を決めた。その晩、慣れないアパートの自室で、先輩方に頂いたサークル紹介冊子を隅から隅まで読んだ。

私の郷里、奈良県山添村は、近畿地方では有数の縄文時代遺跡の密集地域である。小規模な起伏をもつ山地地帯が狩猟採集民にとって良好な住環境となつたらしく、約1万3000年前～7000年前までの遺跡がとりわけ目立つて発見されている。これらの遺跡で見つかった遺物の一部は、筆者が通っていた小学校に隣接する歴史民俗資料館に展示されていた。村の遺跡が「すごい」のだという話も耳にする機会が多く、私のなかでも考古学に対する憧れが育っていた。サークルの紹介冊子をめくりながら、学問として、そして自分の進路として、考古学がたちまちリアルに感じられた。

考古学研究会の活動は、平日週2回の勉強会、週末を利用しての月1回程度の測量調査が主であった。勉強会では部員各自が自由にテーマを設けて口頭発表することになっていて、勉強会がある日は心が躍った。図書館などで集めてきた先行研究を読み解いて、その問題点を厳しく指摘する、毅然とした先輩方の姿勢に憧れた。6月には1回生にも発表の順番が回ってきたので、私は後期旧石器時代の石器の地域性と、動物相や植物相との関係について調べ、文化圏の境界が生じる理由について考えてみた。演習の授業で教科書になっていた本⁽¹⁾に、ナイフ形石器の地域性と環境とが対応していると書かれていて、その記述が気になって続きを読む集中して読めなくなったり。中学校卒業までは村内の人としかほとんど会ったことがなく、三重県の高校に進学してからも伊賀地区の人としか接点がなかった筆者にとって、全国各地から人が集まる大学の環境は大変刺激的だったのだが、そのなかで感じる驚きや新鮮さのルーツが旧石器時代にあるような気がした。また考古学を勉強していくにあたって、古い時代から順番に学んでいこうという考えももっていた。学問の深さを知らない安直な発想ではあるが、こうして私と石器の付き合いが始まった。

2. 旧石器から縄文石器へ

骨などの有機質遺物が残りにくい日本列島の地質環境では、旧石器時代の情報源はほぼ石器に限られる。その分、石器に対する視線は鋭く、目に触れる石器研究のほとんどは旧石器の研究になってくる。旧石器の勉強を進めていくと、どうも本で勉強してるだけでは、研究をやっていくのは難しそうだと思えてきた。実際の石器の観察において細部の特徴をめざとく見つけ、過去の人類の文化や行動を読み取る作業が、研究の根幹になっていることに気がつきはじめた。

どうしたものかと考えあぐねる私を見かねたのか、先輩が卒業生の長井謙治さん（現愛知学院大学）を紹介して下さった。長井さんは東京大学大学院に進学しておられたが、石器の復原製作の腕前と緻密で根気強い遺物観察は、立命館大学では半ば伝説のようになっていた。長井さんが立命館大学に来られた際、遺跡出土の微細剥片（石器づくりの過程で飛び散った、数ミリ大の石片）のピックアップや整理作業をお手伝いした。遺物から過去を紡ぐ考古学とはこういうものか、と得心がいった。それからは私もなんとか石器の観察方法を学ぼうと、キャンパスの隅で石ころを割って、本に載っている写真と比べてみたり、博物館で石器のスケッチを描いてみるようになった。

2回生の春、先輩に誘われて参加した研究会で、岡田憲一さん（奈良県立橿原考古学研究所）と田部剛士さん（現鈴鹿市）と知り合い、その夏に郷里で実施される鶴山遺跡の発掘調査に加えて頂けることになった。自分が育った村を掘れるのも興奮を誘ったが、気鋭の若手研究者らが学術的にこだわりながら、それでいてテンポよく発掘調査を進めていく様子は圧巻だった。先んじて調査に加わっていた奈良大学の学生らが慣れた手つきで作業する傍ら、経験不足でおろおろするばかりの私は大した戦力にはなれなかった。それでも皆で協力しあい、

議論や雑談を交じえて進める発掘調査は、思い描いていたとおりのようで想像だにしなかつた、フィールドの学の魅力であふれていた。

発掘調査が終わると、調査記録の確認や出土遺物の洗浄、分類、観察、図化など、膨大な整理作業が待っている。発掘調査で得られた所見、記録、出土遺物の全てを、誰もが利用できる学術財として資料化しなければならない。岡田さんと田部さんの粋な計らいで、その夏の発掘で出土した石器は山添村で整理されることとなり、私は授業の合間に帰省して、田部さんと石器の待つ整理室に通うことになった。鶴山遺跡の石器には、縁辺がバキバキに碎けた石器や石片が目についた。それが楔形石器とか、両極打法という石割りの動作と関係していることは、比較的早くに気がついた。ちょうどその頃、演習科目のテキストで楔形石器が登場していて⁽²⁾、得体の知れない雰囲気に惹かれて一通り勉強していた。ひととび接点を得ると、それまで見聞きしたり論文で読んだ知識が流れ込んできて、鶴山遺跡の楔形石器や両極打法の正体を知る術に心当たりが浮かんだ。

楔形石器と呼ばれている亀裂まみれの石器は、両極打法で執拗に叩かれて生じたものが大勢を占めていて、両極打法を施された使途不明の石器を楔形石器と呼ぶむきが強まっていた。つまり問うべきは、両極打法がなぜその遺跡で多用されたのかである。その答えを出すには、両極打法によって生じた石片や楔形石器が、個々の遺跡でどのような生涯をたどったのかを読み解けばよい。そして、他の打撃方法でとられた資料の場合と比べてみればよい。要諦は石片を生じさせた打撃法をどうやって特定するかだが、打撃法を様々に実演してみて、生じた石片を比較して相違点を抽出すれば、厳密な識別法を組み立てられる。優れた先輩をまねるように、私の卒業論文は実験考古学⁽³⁾と出土遺物観察⁽⁴⁾の二段構えになった。

3. 繩文石器から縄文・弥生石器へ

卒業論文は一応満足のいく出来にはなったが、観察眼をさらに磨けば、石器が出し惜しみしている情報をもっと引っ張り出せるように感じていた。また、自分がとらえた出来事がどんな歴史の一局面なのか見当もつかず、自分の研究があてなく井戸を掘っているようにも思えた。これらを克服するため、松藤和人先生を頼って同志社大学大学院に進学することに決めた。瀬戸内技法の解説などで知られる先生は、学部生の頃から熱心に研究活動に取り組まれ、遺跡の探索、石器の観察法や図化法の工夫などの基礎レベルから、近畿地方の旧石器研究を立ち上げてきた方だ。先生は「卒業論文の単なる延長では修士論文たりえず、方法論的な進歩がなければならない」という指導方針で、自分の著作を排泄物にたとえる森浩一先生の教えも折々で引用された。卒業論文を過去のものにするのが、第一閥門となつた。

その頃、大学院の先輩にあたる藤田三郎さん（田原本町教育委員会）が、国庫補助事業で発掘調査した唐古・鍵遺跡（奈良県田原本町）の報告書作成に際して、石器の整理を任せられる人材を求め、先生に照会していた。先生の勧めに即応して、私は唐古・鍵遺跡の石器の観察と図化に励むことになった⁽⁵⁾。当初は見栄えのよい石器の図化が中心だったが、石器は

製作過程にそって図化する、つまり製作過程をたどる作業でもあるので、製作時に生じた残滓も検討してみたくなった。その提案を藤田さんに快諾して頂き、プレハブ1軒分の石製遺物から必要な資料を抽出して、石器製作技術を考える作業にも着手した。従来、近畿地方の弥生時代の石器研究は大阪府下で得られた遺物が中心となっていた。これらは好資料ではあるが、特定の時期に限ると資料数が十分でなく、それを検証・補完するには、膨大な石器が出土している唐古・鍵遺跡は最適だった。おかげで唐古・鍵遺跡を中心とした石器製作技術の復原を概ね達成でき⁽⁶⁾、それを縄文時代にまで拡張して、石器製作技術の連続性を論じる修士論文となつた⁽⁷⁾。

博士後期課程に進学すると、たちまち道中が不安になった。直近のゴールを博士論文の完成と見た際、自分になせる体系的な研究、まとまった新規の研究成果をイメージできなかつたのだ。しかし膝を抱えて悩む時間はない。先生が推進しておられた中国・韓国の旧石器時代遺跡調査の科研費研究がまとめの年を迎える私にも事務仕事や成果報告書の編集業務が回ってきた。約半年にわたって自分の研究時間がほとんどなくなる程の激務だったが、代わりに得られたものも大きい。このお手伝いが、火山灰分析の檀原徹さん（京都フィッショントラック社）、地形解析の渡辺満久先生（東洋大学）ら自然科学の研究者や、麻柄一志さん（現魚津歴史民俗博物館）、中川和哉さん（京都府埋蔵文化財調査研究センター）ら石器研究の大先輩、そして中国の研究者らと密に連絡をとるきっかけとなった。この人脉は、私が現在取り組む日本列島や中国の旧石器時代遺跡研究を支える基盤となっている。またこの機会を通じて学んだ自然科学の研究手法、時間管理や印刷・出版のノウハウにいたるまで、のちの研究生活を豊かにする種がたくさん蒔かれた。

先生のお手伝いが一段落した後も、しばらくは博士論文の方向性が定まらず、試行錯誤していた。突破口となったのは、発表義務のある研究室の定例研究会および論集で、何かひねり出さねばとうんうん唸っているなかで、おもしろい着想を得た。石器製作技術から人間集団間の関係をたどることに気がついたのだ⁽⁸⁾。私の修士論文研究によれば、縄文・弥生時代の石器づくりは3～4の工程に区分でき、それぞれの工程に応じた痕跡が遺跡に残されるのだが、なかには後半の工程の痕跡しかもっていない遺跡がある。もちろん前半の工程がなければ石器づくりは成り立たないので、後半の工程しか実施されていない遺跡は、前半の工程の痕跡をもつ別の遺跡とつながっていたはずだ。これに石材の外観の特徴を加味すれば、どの遺跡とどの遺跡が石器づくりのうえでつながっていたのか、特定できるのである。

当時は縄文時代晚期～弥生時代前期がブームで、関連研究を耳にすることが多かつたので、自分もその時期に注目し、実見できる石器が多い大阪府下の遺跡で、その着想を試すこととした。あとは対象となった全ての遺跡の全ての石器をしつこく観察して、気になったことを徹底的に突き詰めた。一つわかると次の疑問がわいてきて、それにどんどん挑戦していく、資料の状況と自分の力量とに均衡がついたところで博士論文をまとめた⁽⁹⁾。授与された博士号は、文化史学の名を付記されている。少々こそばゆい感じもあるが、方向音痴の私にとっては、人間の文化を考えることを忘れてはならないという戒めになっている。

4. 再び旧石器へ

博士号取得後は再び研究の方向性に悩んだが、悩みに費した時間はそれほど長くなかった。先生が着手していた、ホモ・サピエンス以前の人類文化の探究、つまり日本列島の人類史の起源研究が重要な局面を迎えていて、その波に飲み込まれたのだった。この研究プロジェクトは世間では色々言われてはいるが、堆積学や地形学の視点・方法を考古学に取りこみながら進行する野心的なもので⁽¹⁰⁾、旧石器遺跡発掘捏造事件が発覚して以降の日本考古学には必要な取り組みであると思えた。近隣で時間の余裕がある若手が私しかいなかつたことが幸いし、自然科学各分野の研究者から直接に、問題意識や研究のノウハウを教わることができた。最初はお手伝い気分で関わっていた私だったが、腰をすえてやらねばもったいないと思うようになるとだんだん夢中になってきて、自分の研究として10万年以上前の日本列島人を考えた⁽¹¹⁾。とりわけ堆積学と考古学とを組み合わせた研究を説かれる菊池強一先生（岩手県立大学）のご指導は、安定稼働に入っていた私のフィールド調査法を一変させた。発掘調査の進め方、地層の見方、石器の洗い方。これまでわかった気になっていたことが、実は何もわかつていなかつたことを痛感した。何か新しいことを知ると景色が違って見えてきて、もう知らない頃には戻れない。改めて学問の深さとおもしろさを知った。

この頃には、共同研究のおもしろさもわかってきた。歴史系の分野では「論文は一人で書くべし」という考えが根強いが、石器や土器から自然環境まで、製作技術から原料産地推定や年代決定までと多様な対象を多様な角度から分析する考古学では、得意分野を異にする研究者が集まっての共同研究や、共著で作成する論文も増えてきている。フィールドに集って調査をともにする、別々の場所で銘々に研究するなどスタイルは様々だが、意見を交わしたり、作業を分担したり、技術を教わったりしながら一つの論文を仕上げていく。共著論文ができるあがつたときは、一人で論文を仕上げたときとは違った達成感がある。学生時代から共同研究の経験をもつのも大切で、調査に当事者意識をもって参加できるから、学習効果が高くなる。「ベテランだけで仕事をする方が早い」という場面もなくはないが、次の世代の教育と、妥協しない研究を両立する努力が、大学研究者には必要だと思う。

もう一つの転換点は、中国の旧石器調査の再開である。2016年から、アジアのホモ・サピエンス文化の形成過程を明らかにする大型科研費プロジェクトが、西秋良宏先生（東京大学）によって開始された。2010年代に入って以降、機会の減っていた中国・韓国の旧石器調査を再開する機運が高まるなか、周囲は私に、自分の研究プロジェクトを掲げて、この行進に加わることを期待しているようだった。私は学生時代から松藤先生の海外調査に加えて頂いていたものの、最初は院生の義務としてやや後ろ向きに、途中からはサポート役として安住してしまっていた。自分の不勉強を悔いているが、加藤真二さん（奈良文化財研究所）や菊地大樹さん（現総合研究大学院大学）ら中国考古学の先駆者に助けて頂き、河北省文物研究所などの共同研究体制が整ってきた。とりわけ、中国各地を飛び回って調査をしている菊地さんの参画効果は絶大で、行く先々で菊地さんの知人や友人に助けられた。

おかげで年数回、中国を訪問しての調査が可能となってきた。訪中期間のほとんどは、中国の石器の観察や図化記録に従事し、日本国内での作業と変わらない確度の遺物研究を実践している。受入研究機関との信頼関係も厚くなってきて、昨年からは、年代決定のための遺跡の現地調査も開始した。一日中執念深く石器を観察したり、図化、写真撮影、自然科学的な年代決定など、何でも自分たちでこなそうとする私たちの取り組みは、分業体制が敷かれた中国の研究者の目には少し異様に映るらしい。中国では古人骨やDNAの研究が席巻しているが、精緻な石器研究から人のもつ文化の側面を追うことも意味があろう。私たちホモ・サピエンスの祖先が東アジアにやって来て、文化がどのように変わったのか。まだわからないことだらけだが、中国旧石器の声も、この頃は少しずつ聴き取れるようになってきた⁽¹²⁾。

5. これまでとこれから

石器研究者はとりわけ「知識が偏っている」というイメージをもたれがちで、浅学の私には耳が痛い。とはいえ、知識はともかく、私の関心はそれほど狭くないと思っている。今とりとめもなく述べたように、ホモ・サピエンス以前の文化から縄文・弥生時代まで、その時々で全力を注いで研究してきた。また詳述しなかったが、古墳時代やそれ以降の文化を論じたこともある。ただし、古墳の石室石材の濫用事例を調査したり⁽¹³⁾、火打石の仕様過程を跡づけたりといった、石器研究者の発想で綴ったものだ⁽¹⁴⁾。近頃は放射線関係の国家資格を取得して分析装置を操作したり、水の熱膨張率を気にしたり、磁気学や3次元計測の勉強にも励んでいる。どれも人に勧められたり、見聞きして興味をもったものだが、もちろんこれらも、石器や遺跡の研究のためだ。自然科学的な方法も食わず嫌いをせず、研究に使えそうな方法はどんどん使ってみたい。そのような方法を従来の考古学的な方法と組み合わせたり、考古学上の問い合わせにぶつければ、ブレイクスルーにつながることがある⁽¹⁵⁾。石にこだわる分、遺物の観察には妥協せず、そして石に関するものに縁ができるれば何でもやってきたのが、私の研究経過である。

改めて振り返ると、私が周囲の勧めや招きに応じて、大いに流されてきたことは明白で、自助努力と呼べるのは、とにかく歩くのをやめなかつたことくらいだ。強烈な惹きをもつた人、よい機会をもたらしてくれた人、後押しをしてくれた人。様々な出会いに恵まれ、自分がおもしろいと思う研究に打ちこんできた。私にとって「おもしろい」とは、わからないけれど頭から離れないこと、別々の知識が瞬時につながること、解き方の心当たりをすぐに試してみたくなること、その道のりを誰かに聞いてもらいたくなることである。おもしろさは空気中を伝わってくるようで、考古学を始めてから幾度となく、おもしろい研究に没頭する人たちの熱にあてられた。私もこれからの道すがら、願わくば南山大学に集う考古学徒にとつて、そういう人でありたいと思う。

注

- (1) 網野善彦 2000『日本の歴史 00「日本」とは何か』講談社。
- (2) 岡村道雄 1985「機能論」『岩波講座日本考古学 1 研究の方法』: 162-192、岩波書店。
- (3) 上峯篤史 2006「両極打法による剥片剝離実験」『旧石器考古学』68: 17-27。
- (4) 上峯篤史 2008「鵜山遺跡における縄文時代早期石器群の様相」『吾々の考古学』: 15-34、和田晴吾先生還暦記念論集刊行会。
- (5) 田原本町教育委員会 2009『唐古・鍵遺跡 I』。
- (6) 上峯篤史 2010「弥生時代の剥片剝離技術」『古代文化』61 (4): 1-20。
- (7) 上峯篤史 2009「近畿地方における縄文・弥生時代の剥片剝離技術」『日本考古学』28: 1-22。
- (8) 上峯篤史 2010「石器製作の遺跡間連鎖」『考古学は何を語れるか』: 77-78、同志社大学考古学シリーズ刊行会。
- (9) 上峯篤史 2012『縄文・弥生時代石器研究の技術論的転回』雄山閣。
- (10) 松藤和人・上峯篤史(編) 2013『砂原旧石器遺跡の研究』同志社大学考古学研究室。
- (11) 上峯篤史 2014「斑晶観察法による「前期旧石器」の再検討」『旧石器考古学』79: 1-16。
- (12) 上峯篤史 2019「中国北部における新・旧人類文化の交錯劇」『大論争日本人の起源』: 110-146、宝島社。
- (13) 上峯篤史 2004「“古墳の破壊”再考」『朝原山・長刀坂古墳群』: 139-162、立命館大学考古学研究会。
- (14) 上峯篤史 2004「火打石研究の視点」『第2回関西学生考古学研究会大会発表資料集』: 112-129、関西学生考古学研究会。
- (15) 上峯篤史 2018『縄文石器』京都大学学術出版会。

